詩集

わが煩悩

高橋光広

詩　集

わ　が　煩　悩

高橋光広

高 橋 光 広

昭和22年　東北学院（英文科）中退
小・中・高等学校、助教諭・教諭歴任
昭和55年　病気退職、以後療養中
現住所　栃木県今市市千本木343の3

詩集　わが煩悩

昭和59年4月1日発行

著　者　高 橋 光 広
発行者　高 橋 光 広

印刷所　栃木県自費出版
センター

目次

目　次

わが四季

春
しどみ　2
はるのいろ　4
野面　6
こんな明るい日には　8
蛙の季節　10
夏
お祭り　12
六月　15
炎昼　17
灯蛾　19
浮草　22
ツクツク法師　23
秋
秋風　25
秋雨　27
秋雨が長びく時は　29
秋晴れ　31
晩秋　33
夕ぐれ　34
薄っ原　37
とうがらし　39

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

冬
枯薄 42
夕べの灯 44
冬の音 46
初午の風 49
郊外地 51

わが煩悩
煩悩 56
人間 58
どこかそこらで 61
見えないもの 63
読経の声 65
母よ 68
帰って来ている 71
思念 73
恐怖 75
堆積 77
なるように成るまで 80
忘れたわけではありませんが 82
夜の底によろめきだすと 85
その顔 88
がらんどうの唄 90

わが旅
夜汽車の人々 94
函館要塞にて 96
ノシャップ岬 98
知床非情 101
秋の名城 103
ヒロシマ 106
ある観光地へ（雲仙） 109
底穴の中では（三原山） 112

あとがき 115

わが四季

春

しどみ

冬枯れのあとの
枯草の中
草の芽にまじって
しどみの花が目に赤い

点々と赤いのは

遠い空で鳴くひばりが
囀りつくして吐いた血か
すぐ近くで鳴くうぐいすが
のどをしぼって吐いた血か
それとも
冬の間地の底で
病んでいたものが起きあがり
胸から吐いていった血か

せつなく明るい
陽に浮いて
しどみの花の血が赤い
春さきがけて目に赤い

はるのいろ

はるのいろ
黄いろいいろは
よみがえりくる
歓喜のさざなみ

はるのいろの
うすももいろは
空にはなやぐ
あわいあこがれ

はるのいろの
うすいみどりは
少年の日の
記憶のかなしみ

はるのいろの
白いいろは
内にひそんだ
うれいのかげり

はるのいろの
いぶしぎんは
遠いあゆみに
つかれた思い

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

野面

翳れば　また
大いなるものの影現われ
蒼白な冷涼が流れる
陰湿な土の広がり
区画された氷のさざなみ
つやの冷めたビニールの破れ
泥土ににじむ吹雪の片々
しきりなるものは雲間にかくれ
遠い容姿は
霧の向こうに消えてゆく

晴れれば　また
大いなるものふくらんで踊りだす
いくつかの遠い薄白色
黄が緑に浮く明かり
銀箔がはじく散乱光
昔の記憶のオルガンの音色
風が広げる合唱のひびき
ここにかたまって小さな幸せがあり
そこにつんつんつんつんと
童話が語られる

透明無限の
時間と空間の中で

大輪廻の循環は
ゆっくりとしては、いるが
名残りの陰影を薄らげつつ
微温のかげろいをゆらめかせつつ
影と実物を交錯させる

こんな明るい日には

こんな明るい日には
菜の花畑の黄色もとろけて
白い小さな幻影が
ちらちらちらちらと
光りの中で踊っている

こんな明るい日には
野面のどこかで
水が輝き
さざなみが風に流されて
さらさらさらと
光りのなかで歌っている

こんな明るい日には
村のはずれの
緑の林が
新しい生命を息吹いて
ろんろんろんと
光りの中で萌えている

蛙の季節

黒い影に　つつまれた夜の
遠いあたりの
一団となった　こまかな響きが
おのれと対座する　燈火の下の
夜の心をかきたてる

奥底に　にじみいでて
湧き溢れ　もつれ合っては
ゆらめいて
淡い思慕の時の

甘味な陶酔の時の
苦汁の沈思の時の
焰の情熱の時の
彷徨の焦慮の時の
悲痛の悔恨の時の
諦念の嘆息の時の
遠い記憶のまつわりが
いくつも　いくつも
消えたり　輝いたりして
響きの中にゆれてくる

季節の中から
じねんと湧きいでて
生命のさざなみを

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com